



コラム 映画が好きだ

働き者のキティちゃんに続け

学生記者 山口大介(法学部4年)

クールジャパンが叫ばれている昨今、日本のコンテンツ事業が注目を集めている。いち早く、著作権ビジネスに乗り出したサンリオピューロランドのキティちゃんは、海外においてかなりの仕事をしているようで、これからのクールジャパンに期待がかかる。

貿易立国である日本の情勢をみても、海外に売り出すコンテンツビジネスの盛り上がりはこれから必至であるように感じるが、あえて冷めた目でその政策の中身を見ると、制作側にこれから立とうとしている私には、納得のいかない面がいくつかあった。

クールジャパン：「世界が共感する日本」「世界が欲しがる日本」のここと(経済産業省)で、アニメやファッション、伝統文化といった“ソフトパワー”を通じて、将来的な雇用創出や日本経済の活性化につなげようとする戦略。

いわば国策として、コンテンツ産業をグローバル世界で盛り上げていき、日本ブランドを確立していこうと2010年から始められている。最近では復活劇が期待されているが、渦中にあるワーカーたちはクールジャパンにさほど期待していないとの指摘がある。

その一番の要因は、クリエイターへの支援体制が施されていない点である。漫画、アニメに代表される日本のコンテンツは海外で人気を博し、日本のブランドが十分に認知されてきたにもかかわらず、制作者の懐はたいして変化を見せず、相変わらずの安月給でいつの日かと夢を追いつける日々である。

そして、クールジャパンの予算内訳のほとんどが、コンテンツ事業においてはインフラ(社会基盤整備)やコンテンツのプロモーションに多く充てられ、当事者であるクリエイターへの還元場所はどこにも見当たらない。おまけに、クールジャパンの民間議員でAKBプロデューサーの

秋元康氏は「日本中の優秀なクリエイターにひと肌脱いでもらべきだ」と言ってしまう始末。AKBの戦略などで、色々な意見はあるものの、私などはビジネス的な観点から尊敬していたこともあって、この発言は残念だった。

アニメーターと国民全体の収入比較 表1

〔アニメーター〕

〔国民全体〕

年代	年収(万)	年代	平均給与(万)
20	110.4	20~24歳	251
30	213.9	25~29歳	343
40	401.2	30~34歳	404
50	413.7	35~39歳	465
60	491.5	40~44歳	499
70	30	45~49歳	505
		50~54歳	503
		55~59歳	490
		60歳以上	370

出典：JAniCA平成20年
アニメーター実態調査・概要報告

いいものを作るときに、顧客を満足させることはもちろんだが、同時に作り手側もそれなりのご褒美があるべきだ、そして今の日本にはそのシステムが構築されていないとひしひしと感じる。いい例がアニメーターと国民全体の平均収入の差である。

表1に示すようにクリエイターは有名な監督こそ、そこそこの収入を得られるが、ほとんどの人がぎりぎりの生活を強いられているのが実態である。

「時をかける少女」「サマーウォーズ」「オオカミこどもの雨と雪」など、最近では有名監督の仲間入りを果たした細田守氏も、過去にデジモンを手がけていたにも関わらず、収入が少なく他のアルバイトのかけもちをしていたという話もあるくらいである。

クリエイターのモチベーションは「好きだから」の一言に集約されている。こんな状態では、漫画を読んで、映画を観て、あこがれてクリエイターを目指す子どもたちも、クリエイターの夢を子どものころに置き忘れたまま、仕事

に追われるサラリーマンの道を歩んでしまうのであろう。

そうなってしまえば、世界に発信する場所をいくらかくったとしても、クールジャパンを支えるクリエイターは減少していつてしまう。

クールジャパンに関係なく、これからコンテンツ事業を日本の強みとするのなら、より一層の環境整備が求められる。政府をはじめ、日本全体で支えていく必要がある。前回(春号=3月末発行)のコラムにも書かせていただいたが、個人的には映画産業においてハリウッドのようなエコシステムを作り上げ、日本の丁寧なモノづくりの精神から生まれた作品が、世界に広がっていくことを願う。

さて、ここまで読んでくださった方には、大変ありがたく感謝の意を示したいが、同時に読者側の視点に立った自分も、なんとまあ頭だけでっかい大学生だこと、と思うことは否めない。私自身、動きもしないただの批評家が一番嫌いで、文句があるならお前がやれという主義である。

挑戦的な言葉を使って、いない敵を攻撃しているようだが、私たちにも今からできることがあるんじゃないかと思いき動き出した。

中大において好きな映像を思う存分作れなかった経験から、映像制作の環境づくりも含めた映像集団を立ち上げた。しかし、当然ながら一人でできることはちっぽけである。だが、全力で大学生を支援してくれる師匠が現れた。現在は中央大学職員。元々は映像学校で教べんをとっていた。中大生に無償で講座を開いてくれるというのだ。願ってもない話にのっかり、つい先日第1回の授業が始まった。

この団体の名前はTrinity。三位一体という意味が込められている。「音声」「言葉」「動画」のまとまりに



よって映像は構成される。それに中大の映像を作りたい同志が集まれる場所という願いを込めて立ち上げた。

団体のコンセプトは、「学び、そして実践」というように、CM制作を主として、座学だけでなく実践的に学んでいく集団である。

加えて、もう一つの映像団体ToViewoがある。これは、中大の魅力映像で発信していきたいという一人の男の熱意だけで立ち上げられた。中大に100年残る「学生が楽しめる新しい映像メディアを作る」ことが目標らしい。彼とは2年の頃に出会って以来、中大で映像を一緒に作ってきた同志である。

今、彼をはじめ多くの仲間と、既にある映像サークルとタグを組み、映像で何かを残したいと、師の助けを借りながら、エンジンをふかしはじめた。この馬力はまだ雑草馬くらいのものであろう。

しかし、動き始めることができただけでも、自分にとっては光栄なことであり、支えてくれた仲間、そしてなにより大学生の企画に二つ返事で快諾してくれた師に感謝したい。

日本というドデカイ規模で何かをなし得るには、まず、自分の今いる場所(大学)から一歩を踏み出すことが大事だ。何処かの宇宙飛行士の言葉を借りれば、人類にとっては大きな飛躍であることを願って。

